

本日の学び:「聖霊によって」 テキスト:マタイ1章18～21節(参照1:1～17)

【理解の手がかりとして】

マタイによる福音書の初めに記されている「イエス・キリストの系図」はアブラハムから始まる。一方、ルカ福音書3章 23 節以下にもイエスの系図が記されている。そこではアダムまで遡っている。この系図の書き方の相違は非常に興味深い。マタイが時代の古い方から書くのに対し、ルカはイエスから順に時代を遡っていく。そしてルカでは最後に、これが最もインパクトのある言葉だが、「そして神に至る」(ルカ 3:37)という言葉で終わる。「そして神に至る」…ルカ福音書の関心事はここにある。「このイエスはどこから来たのか? 誰から生まれたのか?」という問いに対して、ルカの系図は明確に答える。「イエスは神から来た。神の子である」という答えである。

創世記によれば、その神からまず生まれたのは「アダム」であった。そしてこの「アダム」から、人間の歴史、罪の歴史が始まった。そのアダムから 9 代後には、あの有名な「ノア」の名前がある。そのノアの時代について、聖書はこう記す。「主は、地上に人の悪が増し、常に悪いことばかりを心に思い計っているのを御覧になって、地上に人を造ったことを後悔し、心を痛められた。主は言われた、『わたしは人を創造したが、これを地上からぬぐい去ろう。人だけでなく、家畜も這うものも空の鳥も。わたしはこれらを造ったことを後悔する。』しかし、ノアは主の好意を得た。」(創世記 6:5-8)。

悪いことばかりをする人間、その人間を造ったことへの神の後悔がここに記されている。その中にただ一人、神の前に正しいノアがいて、そしてそのノアのおかげで、人類は全滅を免れるわけである。このノアの物語の結末は、「虹の契約」にある。「あなたたちならびにあなたたちと共にいるすべての生き物と、代々とこしえにわたしが立てる契約のしるしはこれである。すなわち、わたしは雲の中にわたしの虹を置く。これはわたしと大地の間に立てた契約のしるしとなる。」(9:12-13)

この契約は、もう二度と人類を滅ぼさない、という神の恵みの約束であった。このノアの洪水物語は、人間の罪悪に対する神の厳しいさばきを告げると共に、ノアを通して与えられた神の恵みの約束を伝えている。そしてその約束は、ノアの 11 代後(ルカ福音書の系図による)に続くアブラハムを出発点として、具体的なものとなっていく。神と人間との間に結ばれた契約、子孫につながる祝福がいかなるものであるか、そのことを具体的に記したのが旧約聖書。そしてこのマタイ福音書の系図は、その旧約聖書の歴史を、非常にコンパクトにまとめ、イエス・キリストにつなげている貴重な文章である。

*

さて、そのようにマタイによる福音書は、その1章の初めにアブラハムから始まる系図を記している。イザヤ書1章10節に「その日が来れば、エッサイの根は、すべての民の旗印として立てられ、国々はそれを求めて集う。そのとどまるところは栄光に輝く」と記されているように、期待される救い主、メシアは、ダビデの裔、でなければならなかった。ここに血のつながりによる「肉적」な系譜の考え方がある。

ところが、系図は16節において、ここに生まれるお方は、血肉による出生ではないことを明示している。「ヤゴブは…ヨセフの父」ときて、次も同じパターンで「ヨセフはイエスの父」とは言っていない。そうではなくて「ヤゴブはマリヤの夫ヨセフの父とあり、次はこのマリヤからメシア(=キリスト)といわれるイエスが生まれたと語る。ここに神のイスラエルの歴史への驚くべき仕方での介入が起こっている。

それは前代未聞の奇跡としか言いようのない出来事。しかし、同時にこれは主が預言者によって言われたことの成就と説く。そしてこのイエス誕生の出来事をヨセフがどう受け止めるのかが問われてくるのである。

ヨセフと婚約中のマリヤが身重になったという事実は、二人の仲を根底から揺さぶる、また引き裂くような辛い試練の出来事であった。そして聖書は一貫してヨセフがこれにどう立ち向かったかに注目している。結婚を前に、身の覚えのないマリヤの妊娠を知ったヨセフは、離縁を決意する。律法によれば、このような場合、突き放すこと(離縁)と裁くこと(石打)を求めた。しかし、ヨセフは、マリヤを離縁しても、彼が最初の一石を投じることを放棄した。これはヨセフの良心からであろう。その彼の良心は、「彼女を晒し者(さらしもの)にしたくなかったので、彼女とひそかに離縁しようと思った」という別の聖書訳(岩波書店版)から分かる。

しかしヨセフが思いを巡らしていた時、「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリヤを迎え入れなさい」という主の使いの言葉に接した。ヨセフをダビデの子と呼ばせているのは明らかにヨセフがマリヤに生まれてくる子の父となり、それによってその子がメシアであることを示すためであろう。そうして天使は、その子に名前を与える。「イエス」とは、ヘブライ語の名、イエホシュアからきていて、「ヤーウェは救われる」という意味である。そしてその名のとおりに、イエスは「自分の民を罪から救う」(1:21)。

先だってエレミヤ書を学んできたが、イスラエルの歴史において、王国時代から捕囚期にかけて多くの預言者を通してイスラエルの罪が深く認識された。そしてこの罪を消し去り、贖うといったことがイスラエルの救いにとっていかに決定的に重要であるかが明らかになってきた。イエスはこの罪からの救いに生命をかけるため、そのために生まれてこられたのである。

『聖書教育』より

「ヨセフが『正しい人』(1:19)と記されるのは、モーセ律法を盾にイエスに迫ったファリサイ派や律法学者の正しさではなく、婚約破棄という痛みを自ら受け入れ、他者の命と将来を願う正しさを求めたからでしょう」(聖書の学び)～ヨセフの「正しさ」について分かち合ってみてもよいでしょう。